り、帝國學士院から其の功績を認められ學士院賞を贈られた「支那繪畫小史」なども支那に傳はつて支那の學校の教科書などに使用されてゐる。

最近「圖本總覽」などの著述の計畫もあつたが仕事半にして斃れたが、返すがへすも傷ましくおしき限りである（談）

（昭和二年三月十日『国民新聞』）

『東京美術学校校友会月報』第二十五巻第八号には西崖の写真入り追悼記事（経歴の記述に数ヶ所誤りがある。）が二頁に亙って掲載された。その中に西崖の膨大な著述の抜粋が「大村西崖先生編著年表（仮）」として掲載されているが、編著年表については吉田千鶴子著「大村西崖の美術批評」「大村西崖と中国」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十六号、第二十九号）所載の年表を参照されたい。

④ 石田英一の在外研究

昭和二年二月三日、金工科鍛金部教授石田英一（ひでいち）は文部省より満三年間フランスにおける在外研究を命ぜられた。

石田は明治九年四月十一日佐賀県に生まれ、同三十三年本校鍛金科を卒業し、同三十八年十二月本校雇、同四十年六月助教授、大正十四年教授となった。明治三十三年以降軍籍にあり、度々応召し、大正四年除隊する時点では陸軍歩兵曹長であった。

石田の海外派遣上申案（「従大正十五年在外研究員関係書類庶務掛」）には派遣を要する事由として

右石田英一ハ本校鍛金科（現時金工科）出身ニシテ金工科ヲ担当スルコト二十年ニ及ビ優秀ノ技能ヲ有シ金工技術ノ研究ニ熱心ナル者ナルニ付益々其技術ノ蘊奥ヲ究ハムル為ニ歐洲ニ於ケル金工術最新ノ實地的研究ニ従事セシメタク派遣ヲ必要トスルニ由ル

と記されている。彼は昭和二年三月三十一日（実際は四月二十五日）出発、在留期間短縮により同四年六月十六日に帰国し、復職。本校廃止まで在職し、東京芸術大学非常勤講師もつとめた。

⑤ 矢代幸雄の欧米出張

昭和二年三月二日、教授矢代幸雄は文部省より欧米出張を命ぜられた。矢代自筆の出張願（「昭和二年職員関係書類庶務掛」）には次のように記されている。

歐米出張願

小生儀去ル大正十年ヨリ大正十四年ニ亘リテ、西洋美術史ニ関スル文部省在外研究員トシテ歐洲ニ滞留中、主トシテ「イタリヤ」文藝復興期ノ画家「ボティチェリ」ノ研究ニ従事シ、研究ノ結果ハ、之ヲ論文 A Newly Discovered Botticelli（英國 The Burlington Magazine 大正十四年四月号登載）並ビニ著書 Sandro Botticelli 三巻（大正十四年十一月ロンドン市 The Medici Society 出版）トシテ発表致シ置キ候。然ルニ此発表ハ小生ノ企圖シタル研究計画ヲ盡サズ、特ニハ「ボティチェリ」ノ史的考察ニ缺ク可ラザル「ボティチェリ」トソノ周圍トノ関係ニ

就テハ、研究材料ヲ廣ク蒐集整理シタルニモ拘ラズ、當時欧洲滞留期間再度ノ延期満期シタル為メ、研究半途ニシテ中絶ノ止ムナキニ立チ到リ候。此点ハ著書 Sandro Botticelli ノ序文ニ辯明致シ置キタリト雖モ、學徒トシテ小生ノ遺憾ヤル方ナキハ勿論、從来世界ノ「ボティチエリ」研究中、最モ丁寧ナル研究ノ一タルヲ言明シテ憚ラザル小生ノ著述ノ學述的貢献ヲ完フセザル所以カトモ考ヘラレ候　大正十四年小生帰朝致シテ後、Sandro Botticelli「ロンドン」ニ刊行セラレ諸種ノ學術的批評欧米各國ニアラワル、ヤ、財團法人啓明會ハ是ガ價値ヲ認メ、且ツ小生ガ研究継續ノ希望ヲ容レテ「ボティチエリ」〔ママ〕ヲ中心トシタル文藝復興期ノ研究」ナル題目ノ下ニ研究費支給ヲ決定セラレ候　財團法人啓明會ノ支給スル研究費ハ左ノ如ク欧米諸國研究旅行費ヲ含ム

欧米諸国滞在及研究費（一ヶ月三百六十円トシテ一ヶ年間）

金四千三百二十円　旅行費　金三千円

合計　金七千三百二十円

以上研究継續並ビニ完成ノ目的ヲ以テ、小生儀昭和二年四月〔原文空白〕日ヨリ往復共満一ヶ年間欧米各国（ロシヤ、ドイツ、フランス、オーストリヤ、イタリヤ、スペイン、イギリス、北米合衆國、カナダ）ヘ出張致シ度ク、此段願上候也

昭和二年二月十六日

東京美術学校教授　矢代幸雄〔印〕

東京美術学校長正木直彦殿

矢代は帝室博物館から欧米各国博物館の調査も嘱託されて同年四月十四日出発、翌三年五月十一日に帰国し、復職した。

⑥ 松田権六の起用

昭和二年九月二十三日、松田権六が助教授に任命された。松田は明治二十九年石川県金沢市生まれ。同県立工業学校漆工科描金部卒業後本校漆工科に入り、大正八年に卒業した。同年十二月より同十年三月まで兵役（陸軍歩兵少尉）に就いた後、東洋文庫における楽浪漆器の修理に同十四年まで従事。その傍ら、東京市職業訓練所塗装科を受講し、浅井家具株式会社に就職。西洋塗装を修業しつつ自宅での漆器製作にも従事した。同十三年九月、第十二回農商務省工芸展覧会に出品した蒔絵手呂が二等賞を受賞、政府買上げとなり、翌十四年、フランス万国装飾美術工芸博覧会に出品、金牌を授与された。同十五年十一月、株式会社並木製作所（後のパイロット万年筆）に入所し漆工班主査となり、翌昭和二年九月に退職（顧問となる）。同月、本校助教授となり、漆工科蒔絵及び調漆実習を担任した。同三年二月二十五日、宮内省依嘱の御大礼御剣（即位の太刀）糸飾製作助手を命ぜられたが、これについて自著『うるしのつや』（昭和五十六年、日本経済新聞社）で、教壇には立たず、御大礼御剣の外装漆作業に専念して、大小の菊紋三十二個を完成させるのに二年半を要したと記している。昭和二年、第八回帝展に出品、初入選。以後、同展及び新文展、日展に同三十三年までほぼ毎年出品。その間、同四年特選、同五年推薦、同九年と十三年には審査員となり、同十八年に本校教授に昇格、同二十二年に帝国芸術院会員、同三十年に重要無形文化財（蒔絵）の保持者に認定され、同三十八年に東